

ヒロ・コバヤシ万葉集一人旅

聖武天皇皇女・不破内親王

その想像を絶する不幸な生涯

内親王でありながら不幸な人生を歩まれた一人の女性に注目します。

聖武天皇の皇女の一人、不破内親王（ふわのひめみこあるいはふわなしんのう）です。

聖武天皇の皇后になられた光明皇后の皇女ではなく、聖武天皇夫人の県犬養広刀自（あがたのいぬかいひろとじ）の皇女として生まれました。

光明子は聖武天皇が即位してから六年目の天平元年（七二九）八月に皇后になられたので、夫人の県犬養広刀自とはある期間、皇后をめぐって確執があったかもしれませんが。それでも天平元年の半ばには決着がついたのです。

光明皇后は、母は県犬養三千代で、父は藤原不比等ですから名門中の名門出身の女性ですが、初めての平民出身の皇后ということになるので、猶予時間が必要だったのでしょうか。

不破内親王の母も姓氏が示すように県犬養家の出身ですが、藤原不比等に並ぶ人物はいなかったのですから、二人の女性の間には越え難い家柄の差があったのです。

不和内親王は、天武天皇の皇子である新田部親王の子の塩焼王（しおやきのおおきみ）に嫁ぎ、尊敬されるべき人生が約束されていたはずですが。

不破内親王は母の家柄からも、光明子（皇后になられるまで）の皇女、つまり異母姉妹の阿倍内親王と対等意識を持たれ、姉（後述）としての意識を持たれていたとしても不思議ではありません。

しかし、光明子が皇后になられ、皇后の皇女・阿倍内親王が孝謙天皇に即位されると、二人の間には決定的な差と溝ができます。

妹と言え阿倍内親王は天皇に即位されたのですから、天皇に口を挟む余地は全くありません。それでも、なぜ？と問いたくなるほどに不破内親王は、天皇としての阿倍内親王に対抗し、自分を貫き通すのです。

孝謙天皇（重祚・称徳天皇）の治世下では、夫、塩焼王が「橘奈良麻呂の変」、「藤原仲麻呂の変」に巻き込まれ、不破内親王と天皇との確執もあり、想像を絶するほどの厳しい環境に置かれます。

それでも称徳天皇が崩御され、光仁天皇が即位されると、赦されて内親王に復位するのですが、光仁天皇の皇子、山部皇太子が桓武天皇に即位された直後に、不破内親王は、その子、氷上川継の謀叛によって、更に淡路国に配流されました。これだけで、不破内親王がどれほど不幸な人生を過ごされたか明らかです。

これから、不破内親王の数奇な運命を辿りながら、内親王に関わる人たちの人生模様を描いてみます。

不破内親王の生年、没年は不明ですが、その上で、その生涯を辿ります。

聖武天皇には光明皇后との間に、阿倍内親王と皇子が生まれますが、皇子は誕生から一年後に亡くなります。

そのために男子継承者がなく、天平十五年（七四三）一月に、阿倍内親王を皇太子にされ、天平年代が終わると、聖武天皇は譲位されて太上天皇になられ、阿倍内親王が即位されます（孝謙天皇 重祚・称徳天皇）。

一方、聖武天皇夫人の県犬養広刀自の間には、井上内親王、不破内親王、安積親王（あたかのみこ）が生まれます。

安積親王は天平十六年（七四四）一月十三日に、足の病で急逝します。十七歳でした。内舍人として仕えていた万葉歌人として有名な大伴家持が挽歌（卷三・四七五以下六首）を詠み、生前の楽しい思い出の酒宴の歌（卷六・一〇四〇）も残しています。

特に挽歌からは、突然なくなった親王への驚きと悲しみが詠み込まれ、酒宴の歌では、藤原八束（万葉歌人、後に大納言）と三人で夜遅くまで飲み明かす様子が詠まれ、大伴家持が安積親王に如何に親しく仕えていたかが分かります。

井上内親王は志貴皇子の子、白壁王と結婚され、王が光仁天皇に即位されると、皇后になられるのですが、天皇の姉、難波内親王を呪い殺そうとした嫌疑によって、皇后を廃され、皇太子とされていた皇子の也戸王（おさべのおおきみ）と共に幽閉され、宝亀六年（七七五）四月二十七日に共に亡くなります。二人が同時に亡くなったことから自害でしょう。

井上内親王は幼い頃（養老五年（七二二）九月）、井上王と呼ばれていた時に齋宮に選ばれています。続日本紀には「天皇（著者注…元正天皇）は内安殿に出御して、使いを遣わして幣帛を伊勢の大神宮に供えさせ、皇太子（著者注…首皇子（聖武天皇）の娘、井上王を齋宮（いつきのみや）とされた」と記されています。そして、聖武天皇の時代に井上内親王と呼ばれるようになった神亀四年（七二七）九月に、再び「齋宮として伊勢大神宮に侍らせた」と続日本紀に記されました。この時から、約二カ月後の同年閏九月に聖武天皇と光明子夫人（皇后になられるのは二年後）との間に皇太子が生まれます。

この時期は、皇室にとって喜びに満たされた時期でしたが、井上内親王にとっても忘れられない年になったはずです。

齋宮に関して、時代が古くなりますが、天武天皇の時代に大伯皇女が十三歳で泊瀬の齋宮に入られ、翌年、十四歳で齋宮（齋王と同意）として伊勢大神宮に派遣されています。

この前例に従えば、神亀四年の井上内親王の年齢を十四歳として考えることは

可能になりますが、少し考察が必要です。

不破内親王、**井上内親王**それに**阿倍内親王**の三人の姉妹の年齢差のことは、「不破内親王の年齢考」のところで考察します。

不破内親王は新田部親王の子の塩焼王と結婚され、判明している範囲で言えば、川継王と、王女たち（姉妹）が生まれています。

不破内親王は、長命ながら、天皇に即位された異母妹、阿倍内親王との確執から不幸な運命を辿られることになりました。

まず、不破内親王の結婚前後の背景および経緯を考察するために、その夫君の塩焼王のことに話を移します。

塩焼王は天平五年（七三三）三月に無位から従四位下に叙位されます。

このことから塩焼王は三世王（天皇を一世として）であることが確認できます。

新田部親王（二世王）の子という説を半分補強する資料になります。

原則として、初叙位は、大宝・養老律令によれば、二世王（親王あるいは内親王）は四品、三世王は従四位下、四世王以降は従五位下と定められており、ほぼある年齢に達すれば、叙位されるので、初叙位の年というのは、年齢を推定するのに有力な手段です。

塩焼王の父の新田部皇子の初叙位（文武四年）は二十一歳あるいは二十五歳（資料によって異なる）で浄広弑（四位（下））でした。

草壁皇子や大津皇子以外のほとんどの皇子の初叙位はこの位階でした。従ってこの初叙位の年が約二十歳と一つの目安になります。

二世王は二十歳代と想定されます。通説の年齢に従えば、弓削皇子、穗積皇子は共に十六歳（あるいは二十歳）、長皇子は十八歳（あるいは二十四歳）、舎人皇子は二十歳と推定できます。

新田部皇子は前述のように二十一歳（あるいは二十五歳）で初叙位されています。

一方、万葉歌人としても有名な志貴皇子（光仁天皇の父君）は四十歳で初叙位されていることになりましたが、この位階は大宝律令によるので、それ以前の天武天皇十四年四十八位階に従って初叙位されているので、この四品は初記載で、初叙位と考えることはできないと思えます。

志貴皇子は天智天皇の皇子ですが、同じ川島皇子は天武天皇十四年に初叙位されていますが、浄大参（四品以下、二十九歳）と、天智天皇皇子たちは冷遇されています。志貴皇子も記載漏れがあるほど冷遇されていたのかもしれない。ところで三世王の初叙位の平均年齢も二十歳代ですが、王によって前半あるいは後半になる運命があったようです。

初叙位ですから、比較的事務的に処理されたと考えられますが、享年の記録のあいまいさが、初叙位年齢の推定の障害になっています。続日本紀の大宝三年

(七〇三) 十二月に「はじめて皇親と、天皇から数えて五世の王と五位以上の子で、年が二十一歳以上になった者は、その名前を記録して式部省に申し送らせた」という記録があり、大宝律令による皇族の叙位を整備しようとしたのではと想定します。

そこで三世王の例として、長屋王は二十一歳で初叙位(正四位上で特別な叙位)されています。享年の差により、二十九歳説もあります。志貴親王の子で、後に光仁天皇に即位された白壁王は二十九歳で初叙位(従四位下)されています。塩焼王の年齢は天平五年の三世王の初叙位の年齢から推定していきませんが、その詳細は「不破内親王の年齢考」のところで考察します。初叙位時、結婚されていたはずですが、結婚に関しても同じ項で考察します。

再び、塩焼王の経歴の話に戻ります。
天平十二年(七四〇)一月に一階級昇進して従四位上が叙位されます。

その年の十月に聖武天皇の伊勢国への行幸の時に御前長官に任じられます。その功によつてか、翌月の十一月にもう一階級上の正四位下に叙位されます。

この時の昇進は行幸が恙無く実施されたことに対する褒賞でしょうが、皇女・不破内親王を妃とされていたからこそ、天皇の行幸に近侍し、早く昇進できたと推測できます。

この天平十二年(七四〇)は、行幸前に朝廷も驚くほどの大乱、いわゆる「藤原広嗣の乱」が筑紫で発生するのですが、伊勢神宮行幸を決行された、いわゆる行幸の行幸でした。

行幸決行の裏には、恭仁京新都への遷都、全国に国分寺・尼寺建立、それに大仏造立の大願という強い願いがあったのです。

そのことを裏付けるように、その年の十二月には恭仁京建設が宣言され、翌年の天平十三年(七四一)一月には恭仁宮で朝賀を受けられているので、すでにこの時期にはかなり恭仁京は出来上がっていたのでしょう。

そして同年三月に「国分寺建立の詔」が発せられ、東大寺建立と盧舎那仏造立の動きが始まるのです。恭仁京が建設中の時期です。

翌年の天平十四年(七四二)八月に、聖武天皇は盧舎那仏造立の地として紫香樂宮の建設を構想されたのです。

完成してはまだ約三十年しか経過していない平城京があるのに、聖武天皇は即位されてから、難波京、恭仁京を建設され、紫香樂京の建設も始まったのです。

ところが、同年十月に、塩焼王が拘禁されるという事件がおきます。続日本紀の記事には理由は明らかにされず、結果だけが記されました。

塩焼王と四人の女孀が拘禁され、塩焼王は中務卿・正四位下の官位剥奪の上、伊豆国三嶋に、女孀たちはそれぞれ、異なった地に配流になりました。

女孀たちは、塩焼王を世話していたのでしようが、同行できた女孀は一人もい

ませんでした。

この処罰の背景は、紫香樂宮建設と大仏造立に対して、天皇に意見を具申したためと推定されていますが、納得のいく解釈です。

財政的困難が続日本紀にも記されていますので、当時の聖武天皇は異常なほどに、理想郷の建設に邁進されようとしていたのです。天平九年の疫病の大流行とその当時の天候異変によって、天皇は仏教に頼るしかないと考えられたのかもしれない。それだけに、誰も天皇に意見を言えるはずはありません。

ただ、塩焼王は天皇の皇女、不破内親王を妃にしておられたので、自分しか天皇に意見を言える者はいないと思われたのでしょうか。

その結果が配流です。

それでも不破内親王の罪は問われていないようです。

しかしこの事件（「舌禍事件」と称する）以降、塩焼王の人生は少しずつ狂い始めだしました。

配流になってから約四年後、天平十八年（七四六）九月に入京を許され、無位から元の正四位下に復位しました。

同年三月に当時河内守だった大伴古慈斐（おおとものこしび）が祥瑞として「白い亀」が捕獲されたという奏上を喜ばれて、発せられた大赦によって入京が赦されたと考えられます。

塩焼王が伊豆国・三嶋に配流になっていた間の平城京における出来事を列挙してみます。

天平十四年（七四二）十月 塩焼王、三嶋に配流

天平十五年（七四三）十月 「盧舍那仏造立の詔」

天平十六年（七四四）十一月 聖武天皇の臨席の下に甲賀寺（紫

香樂宮）に初めて盧舍那仏の骨柱建設。

天平十七年（七四五）一月 未完成ながら、紫香樂宮で朝賀。

ところが同年五月「どこを最終新都にすべきか」が問題になります。

最終新都をどこにすべきか大問題となり、太政官も動き出さざるを得なくなり。そして同年五月に、太政官は、どこを都にすべきかを百官や大きな寺の僧たちに聞かざるを得なくなるのです。

百官の答えは平城京が大勢を占めました。更に栗栖王（大膳大夫・正四位下）を平城の薬師寺に派遣して四大寺の僧侶に、このことを聞くと、僧侶たちも平城京を選びました。

更に市民が平城京に流れるように帰還するようになって、新都の問題は平城京で決着したのです。元の都に戻ったのです。

恭仁宮および紫香樂宮の建設で、平城京は、廢墟同然になっていたといっても過言ではないはずです。大極殿は移設され、官人はもとより市民も移住していたからです。万葉集にもその様子が詠まれた歌（例…作者不詳歌として巻六・一〇四四、一〇四五番、一〇四六、田辺福麻呂歌集からの歌として巻六・一〇四七、一〇四八、一〇四九）が収録されています。紫香樂宮の建設は中止され、大仏造立は平城京で再スタートすることになったのです。

天平十七年（七四五）九月 聖武天皇の体調不良が公表される。

病気がまだ癒えないのに同年同月に「聖武天皇は平城京に還幸された」と続日本紀に記されています。

天平十八年（七四六）三月 大赦（この年九月に塩焼王入京。）

この大赦は、聖武天皇の病氣回復を願うことでしようが、仏教興隆のために天皇の慈悲を示すためでした。これまでの新都問題を終焉させ、「盧舎那仏造立」に集中したいという願いがあったと推定されます。塩焼王はこの大赦によって入京できたと想定しています。大赦の詔が出されて六カ月経って入京の記事が記されるのですが、実際入京されたのは、三月以降でしょう。

新都建設が問題で配流になったとしたら、塩焼王が指摘した通りの結果（？）になったのです。正論だったのですが、この「舌禍事件」は尾を曳きます。

それから約二年後の天平二十年（七四八）四月二十一日に元正太上天皇が崩御されます。

聖武天皇は天平感宝と改元され、その年の七月に阿倍皇太子に譲位され、孝謙天皇が即位されます。

そして孝謙天皇は天平勝宝と改元され、その年代は八年間続きます。

その半ばの天平勝宝四年（七五二）四月に、東大寺で盧舎那仏開眼供養が盛大に行われます。

孝謙天皇と光明皇太后と共に列席された聖武太上天皇は、大願成就をどれほど喜ばれたかは想像にたくありません。

しかし塩焼王はどんな気持ちで、この開眼供養を迎えたのでしょうか。これだけの大事業だけに明暗はあったはずですから、人によって複雑な心境でこの日を迎えた人もあったと思えますが、塩焼王は過去に拘られることはなかったと想定します。

天平勝宝年間には塩焼王の記事はほとんどありませんが、天平勝宝八歳（年に同じ）（七五六）五月二日に聖武太上天皇が、崩御された時、山作司の一人に任

じられています。妃の不破内親王は聖武天皇の皇女ですから当然の役割だったと考えられますが、完全に復位されたことを表しています。

ところが、皇位問題が起きました。聖武天皇が太上天皇として存命中は、孝謙天皇を認めておられたのですが、次は男子の天皇を考えられていたのでしょうか。

聖武太上天皇の遺詔の皇太子は道祖王（ふなどのおおきみ）でした。塩焼王の弟君です。

もし、あの「舌禍事件」がなかったら、塩焼王が選ばれていたはずですが。

それでも、遺詔通りに道祖王が天皇に即位されれば、塩焼王とその妃の不破内親王の人生は、全くというほどに大きく変わっていたでしょう。

ところが、喪中に道祖王が淫らなことを行い、孝謙天皇の怒りをかい、皇太子を廃されたのです。

このことが皇位継承問題に発展するのです。朝廷において大問題になり、「橘奈良麻呂の変」に発展するのです。

聖武太上天皇が崩御されてから約半年後の天平勝宝九歳（年に同じ、後に改元されて天平宝字元年）（七五七）一月六日に元左大臣・橘諸兄が亡くなっていたので、調停者がいなくなつて、問題が大きくなったのかもしれない。

この時、新田部親王の子の道祖王の兄である塩焼王を天皇に押す意見もあったのです。右大臣・藤原豊成と中務卿・藤原永手の二人が塩焼王を推薦しました。

時の最高権力者・右大臣と、当時中務卿とは言え、後に右大臣にもなった人物です。しかも二人は最も有力な藤原家の出身です。

しかし、塩焼王は、約十四年前の、「舌禍事件」を指摘され、候補から外されました。新田部親王の子たちに候補者はいなくなりました。

そこで舍人親王の子たち、船王、三原王が候補に上げられたのですが、意外にも末弟の大炊王が選ばれ、淳仁天皇として即位されることになりました。

この大炊王を孝謙天皇に説得したのは、野望を抱く藤原仲麻呂でしょう。

それは、藤原仲麻呂の長男の真従が亡くなり、未亡人となっていた栗田諸姉を大炊王に嫁がせ、自宅に住まわせたことから分かるように、大炊王は藤原仲麻呂のもつとも御しやすい王だったからです。

先の左大臣・橘諸兄の長子、橘奈良麻呂を筆頭にして藤原仲麻呂の野望に疑念を抱く人たちが、藤原仲麻呂に反抗して立ち上がったのが、「橘奈良麻呂の変」です。天平勝宝九歳（年に同じ）（七五七）六月頃から事件が明らかになってきました。

橘奈良麻呂たちの意中の候補は黄文王・安宿王（いずれも長屋王の子）それに塩焼王で、それに道祖王もまだ候補でした。

長屋王の王たちも含まれていますが、あくまで新田部親王の子を候補にし、聖

武太上天皇の遺詔を重視しています。

それでも塩焼王はこの「変」では中立を守ったと思われま

この「変」発生の前月の五月と六月に、それぞれ正四位上に昇級し、大蔵卿に任じられていた塩焼王は、この「変」で罪を問われたのですが、謀議に加わらず、謀議も知らされていなかったことと、新田部親王の子であることから許されています。

この頃、塩焼王は、「水上真人」の姓が与えられ、皇籍から降下しています。

「橘奈良麻呂の変」が一段落した天平勝宝九歳（年に同じ）八月に天平宝字と改元されました。

皇位を淳仁天皇に譲られましたでしたが、孝謙天皇は高野天皇として、国務・外交等重要な政務を掌握しながら、淳仁天皇をコントロールできる立場を保たれたのです。

この「変」を鎮圧し、絶対権威を手にした藤原仲麻呂は、塩焼王、すなわち氷上（真人）塩焼を重用しました。

翌年の天平宝字二年（七五八）八月に従三位が叙位され、天平宝字六年（七六二）一月には信部（中務）卿に任じられ、参議に選ばれました。

ところが、天平宝字六年（七六二）頃から高野天皇がますます道鏡を重用されるようになり、この年の五月ころから淳仁天皇との仲がうまくいなくなることが続日本紀に記録されています。

高野天皇の道鏡への信任が厚くなるにつれ、藤原仲麻呂の権力も脆弱化していったのです。そして天平宝字八年（七六四）九月に藤原仲麻呂は道鏡と天皇に対して謀叛を企てたのです。

「変」の平定後に明らかになったことは、藤原仲麻呂は氷上塩焼を天皇にしようとしていたということです。

敗退していた藤原仲麻呂とそのほとんどの子たちは捕えられ斬殺されました。

共に逃避していた氷上塩焼も同じように斬殺されました。

ほぼ同時に淳仁天皇も淡路国に幽閉され、親王は淡路公と称されましたが、その地で約一年後に亡くなりました。

新田部親王の子として生まれ、聖武天皇の皇女、不破内親王を妃にした塩焼王は、あの「天平十四年の舌禍事件」がなければ、天皇に即位される機会があったのです。数奇な運命に翻弄された王だったことが判ります。

この間、妃の不破内親王のことは、一切記録にありませんが、夫の数奇な運命をどう生き抜いてこられたかは、想像できるといえるものです。

天平十年頃までの懐かしい思い出はあるにせよ、夫の人生の後半は伊豆国・三嶋への配流、「橘奈良麻呂の変」それに「藤原仲麻呂の変」と続き、妃として心休まる時はなかったでしょう。

しかし、夫の死後、不破内親王は更に数奇な運命を歩まれることとなります。少し、時間を逆戻りさせますが、「藤原仲麻呂の変」の前年の天平宝字七年（七六三）一月に不破内親王は無位から二世王（天皇一世とする）の初叙位、四品を受けています。この年、夫の塩焼は皇籍を離れ臣下に降下していますが、その妃の不破内親王はまだ皇籍に留まっていたこととなります。

不破内親王の年齢考

不破内親王の生年と没年は不明です。そこで、父君の聖武天皇、異母姉妹の孝謙天皇の年齢を参考にしながら、不破内親王の年齢を推定します。

まず参考になるのが、父君にあたる聖武天皇の年齢です。
 聖武天皇は天平勝宝八年（七五六）五月二日に五十六歳で崩御されています。この続日本紀の記録から、聖武天皇は大宝元年（七〇一）年に誕生されたこととなります。この年、その父君の文武天皇は十九歳でした。その文武天皇は、その父君の草壁皇子が二十二歳の時に誕生されています。日本書紀および続日本紀の記録に違和感はありません。

次に光明皇后ですが、天平宝字四年（七六〇）六月七日に六十歳で亡くなっています。計算すれば、生年は聖武天皇と同じであることが分かります。次に、孝謙天皇は宝亀元年（七七〇）八月四日に五十三歳で亡くなっています。計算すれば、養老二年（七一八）に誕生されていますので、聖武天皇が十八歳の時の皇女です。

さらにお二人には神亀四年（七二七）に誕生され、翌年亡くなった皇太子は聖武天皇が二十七歳の時の皇子です。

一方、県犬養家刀自は、その薨伝（天平宝字六年（七六二）十月十四日薨）によれば、聖武天皇が皇太子の時に入内したとの記録があるので、聖武天皇が十四歳以降に結婚されたこととなります。こうして考えると、県犬養家刀自夫人の生年は不明ですが、光明子よりも年少で、早く結婚されていたことが想定できます。

この夫人には井上内親王、不破内親王と安積親王が生まれています。

安積親王は天平十六年（七四四）一月十三日に、足の病で、十七歳で急逝しましたことは先述していますが、この享年から計算すると、神亀五年に誕生されています。聖武天皇が二十七歳の時で、奇妙な符合ですが、光明子の皇子が亡くなった悲しみの年に誕生したこととなります。

一方、**井上内親王**は続日本紀によれば、幼年の頃に井上王と呼ばれていた時期、元正天皇の養老五年（七二二）九月に伊勢大神宮の齋宮に任じられました。皇太子の娘と特定されていることから、井上王と井上内親王は同一女性です。幼少と成人後の呼称が変わる例と言えるでしょう。

時代が古くなりますが、齋宮に関して、天武天皇時代の大伯皇女が齋宮に派遣された時の年齢は十四歳の時でした。そこで、井上王が齋宮に選ばれた年の年齢を十四歳とすれば、この井上王は聖武天皇が九歳の時に誕生されたことになり、不合理な推定となります。

ところが、聖武天皇が即位してから四年目の神龜四年（七二七）九月に井上内親王が齋宮に任じられました。この時の井上内親王の年齢を十四歳と想定すれば、聖武天皇が十四歳の時に、誕生されたことになり、当時の皇族の結婚年齢から考えて、違和感はなくなります。県犬養家刀自が夫人として入内された時期に対応します。

もう一つの井上内親王の年齢の推定方法として、その夫君の光仁天皇の年齢から推定することです。井上内親王が嫁がれた光仁天皇は太上天皇として、天応元年（七八一）十二月に七十三歳で崩御されました。

光仁天皇は聖武天皇よりも八歳年少ということになります。

そうだとすれば光仁天皇は和銅二年（七〇九）に誕生されたことになり、井上内親王と五歳の差になり、結婚相手としても納得がいきます。

ところで齋宮に選ばれた神龜四年の時の十四歳説に従えば、井上内親王は阿倍内親王（孝謙天皇）より四歳年長ということになります。

問題は本著の主人公不破内親王の年齢の推定です。

全く信頼すべき情報がありませんが、いくつかの情報を吟味してみます。

その一つは齋宮（齋王）に選ばれたのは井上内親王であって、なぜ不破内親王ではなかったのかということ。それは齋宮に選ばれる適齢期に井上内親王は早く到達したからと考えます。この考え方すれば、井上内親王の方が姉です。

天武天皇の時代の大伯皇女は、母の太田皇女が天武天皇の妃としての皇女の中で最年長であり、妃になった皇女たちの娘たちの中で、一番年長者であったので齋宮に選ばれたと想定されます。

第二は夫君の塩焼王の初叙位の時の年齢を推定し、不破内親王との結婚適齢期を推定することです。

三世王の初叙位に関して、長屋王と白壁王（光仁天皇）の例を先述しました。少し詳しく、再び取り上げます。長屋王は高市皇子（日本書紀）の子で、父は皇太子と見なされ、持統天皇の次に天皇に即位される可能性もあったのですが、不幸にも亡くなりその可能性はなくなりました。しかし、高市皇子は草壁皇太子の子、軽皇子の後見役を持統天皇から命じられていた可能性があります。

高市皇子が亡くなると（持統天皇十年（六九六）七月十日）、約一年後（持統天皇十一年（六九七）八月）に、軽皇子に讓位され、文武天皇が即位されます。

文武天皇は高市皇子に支援されていた関係で、その子の長屋王を信頼されていたと推定します。

なぜなら、長屋王は文武天皇の妹君である吉備内親王を妃にされています。

長屋王が二十一歳で正四位下という格別の初叙位を受けたことに納得がいく背景がここにあると想定します（初叙位が高位階であるので、二十九歳説を否定することはできません。）

そういう意味では塩焼王は聖武天皇の皇女、不破内親王を妃にされています。単純に推定すれば、塩焼王も二十歳代の極前半に初叙位される環境にありました。

しかも、塩焼王が初叙位された年には父君の新田部親王はまだ生存されていました。約二年後に亡くなっていますが、少なくとも塩焼王は、初叙位には恵まれた環境にあったことが分かります。

しかし、もう一人、井上内親王が妃となった白壁王は二十九歳で初叙位されました。三世王としては遅すぎる初叙位です。

白壁王は志貴親王の子ですが、その母君は紀椽姫（きのとちひめ）です。貴族といえ平民出身です。それに井上内親王との結婚は非常に晩婚であることが想定されます。

齋宮の資料によれば、井上内親王は七二一年から七四四年まで齋宮だったという記録があります。七二一年は養老五年で、井上王として齋宮に任じられた年です。続日本紀の記録にも符合します。一方、七四四年は天平十六年です。

井上内親王は続日本紀によれば天平十九年（七四七）一月に無品から二品に初叙位されています。親王、内親王とも初叙位は四品ですから、二品という叙位は、齋宮の実績と齋宮として過ごした年月が考慮されたのでしょうか。

先の齋宮職の期間は二十六年に及びますが、この天平十九年というのは齋宮を辞して三年目になります。そのことは違和感はありませんが、白壁王との結婚は齋宮を辞してからと考えざるを得ません。

そうだとすれば、齋宮を辞した翌年の天平十七年に結婚されたと考えることは可能です。それでも白壁王は三十七歳ということになります。

井上内親王は聖武天皇が十四歳の時に誕生され、井上王として齋宮に選ばれた時の年齢が八歳で、再び井上内親王として齋宮に選ばれた時の年齢を十四歳と想定してきました。この想定によれば、齋宮を辞した翌年の年齢は三十二歳ということになります。井上内親王には、一時皇太子と見なされた也戸王が生まれています。晩婚で出産されたという新しい知見が得られたことになります。

この想定で、白壁王と井上内親王の年齢差は、五歳ということになり、結婚に違和感のない年齢差です。ただ、井上内親王が永く齋宮を務めておられたので、結婚適年齢差は、曖昧になりそうですが、その時期に白壁王が井上内親王を射とめられたのは、興味ある恋物語が秘められているのかもしれない。

興味ある情報を追加します。

それは天長六年（八二九）八月二十日に亡くなった酒人内親王の薨伝です。光仁天皇と井上皇后の皇女で、七十六歳で亡くなったと記されています。この享年で計算すると、神龜四年・齋宮に選ばれた時の年齢を十四歳とした説では、井上内親王が四十一歳の時の皇女ということになります。当時の女性としては高齡出産ということになります。それでも、井上内親王が結婚可能になるのは、同年齡説で三十二歳以降になりますし、一時、皇太子と見なされた他戸王がいますので、同年齡説を変更しなければならぬ理由は無いようです。

この酒人内親王も齋宮に任じられています。続日本紀によれば、酒人内親王が十九歳の時に任じられたことになり、その母の井上内親王が内親王に任じられた時の根拠がぐらつきませんが、五歳の差ですし、その後の白壁王（光仁天皇）との結婚を考えると限りなく、井上内親王の場合には十四歳説がより合理的のように思います。

少し、井上内親王の生涯の一時期に深入りしましたが、要は、天平九年（七三七）に白壁王が初叙位された年には、井上内親王は齋宮であり、結婚されていなかったということ。父君の志貴親王も約二十一年前に亡くなっていました。白壁王は、三世王としては有力な後見者が少なかったと考えられます。

それでも、二十九歳で初叙位というのは、王自身にそれなりの理由（病気、あるいは勉学等）があったと考えられ、統計的には異常値と考えられます。

そうだとすれば、環境的に恵まれていた塩焼王は天平五年（七三三）三月に無位から従四位下に叙位された時の年齢を二十一歳から二十五歳の範囲で考えることは可能でしょう。

二十三歳と二歳と考へ、約二十三歳と仮定して話を進めます。

齋宮に任じられたことから井上内親王の方が、不破内親王より年長とする説を先述しましたが、この説を重視して考察を進め、一歳、二歳、三歳年少と仮定（四歳年少とすれば阿倍内親王（孝謙天皇）と同年齡になるので、四歳年少説は考慮しない）すれば、塩焼王との年齢差はそれぞれ四歳、五歳、六歳ということになります。いずれも結婚に違和感のない年齢差です。

平均的推定年齢差として五歳説を仮定すれば、県犬養家刀自から生まれた井上内親王、不破内親王それに安積親王は、聖武天皇がそれぞれ十四歳、十六歳、二十八歳の時に生まれたことになります。安積皇子の場合には、その母が県犬養家刀自かという疑念はありますが、通説に従い、問題にすることではないと想定します。

不破内親王は、異母姉妹の阿倍内親王（孝謙天皇、重祚・称徳天皇）より、年長と想定しました。天皇である孝謙天皇に意見を言い、意地を張られたのは姉という意識があったからだろうと考えます。不破内親王と孝謙天皇との年齢差は約二歳ということになりますが、この前提で、これ以降の話を進めます。

ここから井上内親王、不破内親王それに塩焼王の経歴には、この推定年齢を「約」を付記します。

不破内親王が続日本紀に初登場するのは、天平宝字七年（七六三）一月の初叙位の時で、この年の年齢は約四十八歳ということになります。初叙位としては明らかに遅れています。尋常な初叙位でないことは明瞭です。

夫君の塩焼王の「舌禍事件」、伊豆国・三嶋配流等が影響して初叙位が大幅に遅れたことが想定できます。

それでも、異母姉妹としての高野天皇（孝謙天皇）の配慮があったはずですが、藤原仲麻呂が氷上塩焼を天皇に担ごうとする変則的な思いになったのは、不破内親王の存在があったからかもしれません。

しかし、夫君、氷上塩焼は翌年の天平宝字八年（七六四）九月の「藤原仲麻呂の変」で天皇に担がれて、惨殺されるのです（約五十四歳、すなわち享年）。

さすがにこの時には不破内親王も内親王を剥奪されたようです。

ところが、天平宝字（八年間）、天平神護（二年間）が過ぎ、さらに改元された神護慶雲の三年（七六九）五月に称徳天皇（前・孝謙天皇）の大不興を買うのです。この時の不破内親王の推定年齢は約五十四歳です。

その理由は、称徳天皇と道鏡の関係を諫められたからだろうと推定します。

天皇は詔を出して断罪されました。

続日本紀の記述に従うと「不破内親王は、先の朝廷（淳仁朝）の時代に勅があつて、内親王の名を削られた。しかるに悪事を積むことをやめず、重ねて不敬を行つた。その犯したところを検討すると、罪は八虐に相当する。しかし朕は思うところがあるため、特にその罪を許すこととする。そこで「厨真人厨女（くりやのまひとくりやめ）」の姓名を与え、平城京中には住まわせないことにする。また氷上志許志麻呂（ひかみのしけしまろ）（著者注・氷上川継）はその父の塩焼王を朝廷が見捨てた日に、父と共に処分に従わせるべきであった。しかし母の不破が朕と異母姉妹であったことにより連座させなかつた。ところが今またその母の悪行がますます明らかになってきたので、志許志麻呂を遠流に処し、土佐国に配流する」（宇治谷猛訳）と。

氷上川継は、称徳天皇への母の怨念のために、土佐国に配流されたのです。

不破内親王の怨念がいかに大きいか分かります。子たちまで巻き込んでいるからです。

ところが同年同月のいく日か過ぎた時に、「犬部姉女（いぬべのあねめ）」が告訴されます。不破内親王家と交流があったのでしよう。

彼女は、以前、県犬養姉女（あがたいぬかいのあねめ）と呼ばれ、光明皇后の母と同門の出身者ですから、由緒ある女性であったのです。しかも高野天皇（孝謙天皇の太上天皇名）のお側に仕えていたのです。

県犬養姉女は天平宝字七年（七六三）一月に従六位下から従五位下に叙位されています。「藤原仲麻呂の変」が発覚する約一年半前の頃ですから、称徳天皇と道鏡との関係において、道鏡の野心に藤原仲麻呂は疑心暗疑に陥っていた時期です。

そして「変」の翌年の改元された天平神護元年（七六五）一月に従五位上に昇進しています。称徳天皇に仕えていたと考えられる昇進です。

ところが不破内親王と意を通じ、先の「志許志麻呂」を天皇にしようとする無謀な企てを行ったというのです。天平神護元年（七六五）八月の頃でした。

天皇の髪を佐保川の鬮髹の中にいれて、大宮の内に持ち込み、呪咀を行っていたのですから尋常なことではありません。それも三度に及んだというのです。

「これらの罪はすべて死刑に相当するが、慈悲によって罪一等を降して、元の名に戻して遠流（配流先は不明）にする」との詔が出されます。県犬養姉女は再び「犬部姉女」と呼ばれることになりました。

県犬養姉女も不破内親王の一味として断罪されました。ところが、神護慶雲年代に入ると、称徳天皇は健康に不安を覚えられるようになりました。

神護慶雲三年（七六九）七月、**先の不興から二カ月後ですが**、厨（真人）厨女に封戸四十戸と水田十町を賜っています。不破内親王の生活の保証のためですが、健康の回復を願うための功德の一つであったはずですが。

しかし、それだけではないでしょう。やはり異母姉妹としての情があったのです。この年の不破内親王の推定年齢は約五十四歳ということになります。

この翌年の宝亀（神護慶雲四年とすべきですが・・・）元年（七七〇）八月四日に称徳天皇が崩御（五十三歳）されます。

不破内親王の怨念は消え去ったのでしょうか。
志貴親王の子、白壁王が光仁天皇として即位され、宝亀に改元されます。

光仁天皇の時代になると早速、「橘奈良麻呂の変」と「藤原仲麻呂の変」の関係者、それに称徳天皇と道鏡によって引き起こされたすべての不祥事の関係者すべてが許されることになりました。

宝亀元年（七七〇）十一月に「厨真人厨女」（不破内親王）の同母姉の井上内親王が皇后（約五十七歳）に選ばれます。

「厨真人厨女」の人生は好転し始めたのです。

宝亀三年（七七二）十二月に「厨真人厨女」の姓は原籍の不破内親王に戻され、翌年の同四年一月に、元の四品に復位しました。

この時、不破内親王の推定年齢は約五十八歳だったことになりました。

光仁天皇が即位されて、皇籍が復活するのに、三年も経過したのは、称徳天皇に反抗していたこと、天皇の裳が明ける期間を考慮するとやむを得ないことだ

ったのかもしれない。

時間を少し逆に戻しますが、井上皇后は宝龜三年（七七二）三月に、光仁天皇の同母姉の難波内親王を呪い殺そうとした嫌疑によって皇后の地位を廃され、二カ月後には皇太子の他戸親王も皇太子を廃されました。

翌年、宝龜四年（七七三）十月に幽閉され、同六年（七七五）四月に井上内親王と他戸王は共に亡くなります。続日本紀の記述によれば、二人は自害されたことが想定されます。

推定のための参考資料・日本後紀(中)の大同(平城天皇)二年(八〇七)十月に、中務卿・三品だった伊予親王の謀反の企てが発覚し、伊予親王と母の藤原吉子は幽閉され、親王は廃されます。その記事の中に、二人は飲食を断たれ、十日後に「毒を仰いで死去した」と記されています。希有の記録ですが、井上内親王と他戸王もこんな状況(断罪の一種?)で亡くなったのでしょうか。

しかし、この事件とは関係ないように不破内親王は昇進されていきます。

井上内親王が幽閉された年、宝龜四年（七七三）五月には三品に、それから八年後の天応元年（七八一）十一月には二品に叙位されました。

母が皇族として三品を叙位された宝龜四年頃には、土佐国に配流になっていた氷上志許志麻呂（氷上川継）は、光仁天皇の恩赦を受けて、入京していたでしょう。それでも、氷上川継の初叙位（従五位下）は宝龜十年一月でした。無位から従五位下に叙位されていますので、入京後に官人になっていなかったのです。通常、王と称される人たち（いわゆる三世以降）の初叙位は二十歳代半ばまでと考えても良いようですが、氷上川継の場合は、土佐国配流の期間がありますから、少なくとも十年あるいは二十年は遅かったでしょう。どのくらい遅れたかを川継の年齢考で考察してみます。

氷上川継の年齢考

まず、三十五歳で初叙位と想定してみましよう。

そうであれば川継が誕生したのは、不破内親王の推定年齢が約三十歳の時になり、天平十七年に相当します。

しかし、塩焼王が伊豆国・三嶋から入京をゆるされたのは、天平十八年（七四六）九月ですから、初叙位三十五歳説は考えられないことになり、入京後とすれば、もっと若い年齢を想定しなければなりません。

そうだとすれば塩焼王の配流年（天平十四年）以前のいずれかの年に誕生したと考えねばなりません。

仮に、天平十二年であれば、初叙位の時の年齢は四十歳ということになり、不破内親王が約二十五歳の時に生まれたことになります。

氷上川継には姉君がおられるので、より合理的になってきます。

それでも少し違和感がありますので、五年誕生年を先に延ばしてみます。

そうすれば、初叙位は四十五歳、不破内親王が二十歳の時に誕生し、誕生年は天平七年ということになります。

従って、氷上川継の初叙位の時の宝龜十年の推定年齢は約四十歳から四十五歳まで考えられそうです。そこで四十二歳か三歳と想定し、以降約四十二歳説で話を進めます。(注：三歳の推定誤差範囲は読者の方の判断に委ねます)

一見、平穏な生活が戻ったようですが、不破内親王は姉君・井上内親王の「呪咀事件」をどんな気持ちで受け止めていたのでしょうか。

翌月の天応元年十二月二十三日に光仁太上天皇が崩御されます(享年七十二歳)。光仁天皇自ら、天応と改元され、その年の四月に山部皇太子に皇位を譲られ、太上天皇になられていました。

山部皇太子が桓武天皇として即位され、延暦と改元されました。

まさしく桓武天皇の御代が正式に始まろうとした時に、塩焼王と不破内親王の息子、氷上川継が謀叛(約四十五歳)を起こすのです。怨念のマグマが不破内親王の息子、氷上川継から噴き出すのです。

父や母の怨念が彼を謀叛に駆り立てたと想定されますが、高齢で初叙位されたことも氷上川継の不満であったでしょうか。しかし、そのことは納得していません。

謀叛ですから本来なら死罪ですが、光仁太上天皇の服喪中であり、伊豆国・三嶋に配流になります。配流先は父の塩焼王が配流された同じ土地です。この時は妻の藤原法菴も同行を許されています。

この藤原法菴の祖父は女性万葉歌人の大伴坂上郎女に恋した藤原麻呂で、その父は藤原浜成です。

母の不破内親王と川継の姉妹は淡路国に移されることになりました。この年の不破内親王の推定年齢は約六十七歳です。

皇女として老年です。不破内親王は、淡路国で亡くなったのでしょうか。何年間、侘びしく生きのびられたのでしょうか。同じく当地に配流になった氷上川継の姉妹君たちはどうなったのでしょうか。

二十三年後にして、氷上川継は桓武天皇の恩赦によって罪が許され、元の官位に復してしていますが、姉妹たちも赦されている可能性も十分ありますが、記録を辿ることはできません。

聖武天皇の二人の内親王である井上内親王と不破内親王が同じように苛酷な運命を負われたのは不思議でなりません。

以下に、関心のあるテーマ毎に話をまとめてみました。

その一 氷上川継事件の背景

桓武天皇の即位早々の延暦元年(七八二)閏一月に、氷上川継の資人の不審な行動

を尋問され、白状したことによって「朝廷を覆そうとしていた」という氷上川継事件が明らかになります。

この事件において、左大弁・従三位の大伴家持、それに左大臣・正二位の藤原魚名等が連座の嫌疑をかけられました。

これらの人物が連座していることから、氷上川継は父と母の怨念を果たそうとしたのではなく、この時期、進行していた長岡宮遷都が事件の核心だったと考えています。

父、塩焼王（当時）が紫香樂宮建設に反対したために配流になったという思いと、長岡京遷都に批判的であった大伴家持それに藤原魚名に同調の感触を得たから決行しようと準備（？）していたと考えられます。

平城京から長岡京に遷都することに三人は批判的だったのでしょう。

この事件から左大臣・藤原魚名は権大宰帥に左遷され、息子たちも配流されま

す。一方大伴家持は一時、京外追放になりますが、まもなく復位しますが、その後は桓武天皇から遠ざけられるようになったと想定しています。

氷上川継の父、塩焼王は、聖武天皇の恭仁宮遷都早々に更に紫香樂宮建設が始まるうとした時に反対（？）して、伊豆国三嶋に流罪になったことは先述しましたが、遷都に関して、氷上川継は自ら配流になりながら、父の判断の正しさと天皇にも進言する勇氣をもっていたことを誇りにしていたのかもしれませんが。

それだけに、遷都問題になると、父、塩焼王のことが思い出されるのでしょう。

母の不破内親王を恩赦によって、皇族に戻したのは桓武天皇の父君の光仁天皇ですから、氷上川継が桓武天皇の朝廷に謀反を起したということは、怨念だけで謀反を起こしたと考えることはできません。

長岡宮遷都問題が深く関わっていたと考えます。

謀反の罪は斬殺ですが、光仁天皇の喪中でもあり、氷上川継は死罪から罪を一等減じられて、父の配流先だった伊豆国三嶋に配流になったことは先述しました。

この事件に関係して裁かれた人たち

その一 氷上川継の一味

氷上川継の一味として、三方王（従四位下）とその妻である弓削王女（正五位上）、山上船主（従五位下）が断罪されました。それでも死罪より一等減じられて、三方王と弓削皇女は日向国に、山上船主は隱岐に流されました。その他の仲間も法によって処分されたことが記されています。

彼らが裁かれた罪状は「天皇を呪詛しようとした」ということになっています。呪詛という点では、山上船主が陰陽頭・天文博士であったことを考えると納得がいきます。

呪詛して天皇が亡くなれば、自分が天皇と考えることは不可能です。

皇太子に相良(さわら)親王もおられるからです。

この中で、隱岐介として隱岐島に配流されていた山上船主は生き抜いて、二十三年後に入京が赦されていますが、入京後の消息は不明です。一方三方王は従四位下でありながら、日向介として流罪になります。二十三年後の大赦に名前が見当たりません。この時の大赦は生死にかかわらずということでしたので、許されていない可能性があります。三方王も数奇な運命を辿りました。続日本紀からその生涯の一端を明らかにしてみます。

三方王は天平勝宝元年(七四九)四月に無位から従五位下に叙せられました。この時、同時に三使王と宗形王も同じ叙位を受けました。

ところが、それから十年後の天平宝字三年(七五九)六月に、三使王と共に従五位下から四階級上位の従四位下に叙せられます。

一方、同年同月に従四位下の室女王と飛鳥田女王が二世王の四品を叙位され、従五位下の弓削女王も従四位下に叙位されます。

このことは、舍人親王の子の大炊王が即位して淳仁天皇に即位されたことに関係があります。この即位によって兄たち、船王と池田王は親王と称されるようになります。従つて、三方王と弓削女王、それに宗形王は、船王あるいは池田王の息子と娘ということになります。

どの王の息子、娘かと特定することはできませんが、この三人の王と女王とは、船王と池田王の息子、娘であることは確かです。

後にこの推定が正しいことを述べます。

同年七月に従四位下で木工頭に叙せられます。それ以降、続日本紀からは消息が途絶えます。

更に先に進む前に万葉集の中の三方王を辿ってみます。続日本紀では三方王、三形王、御方王、万葉集では三形王ですが、同一人物と考えてよさそうです。万葉集では三形王となっているので、この表記で通します。万葉集には三形王の自作歌は二首(巻二十・四四八八と四五一一)が収録されています。三形王と大伴家持たちの親しい交流を裏付ける万葉集の歌に言及します。

その一つは、題詞に「勝宝九歳の六月二十三日に、大監物三形王の宅にして宴せる歌一首」とある兵部大輔・大伴家持の歌(巻二十・四四八三)です。三形王の官職は「大監物」ですが、続日本紀からは確認できません。一方大伴家持が兵部大輔だったことは確認できます。

大伴家持と三形王は酒を飲みかわすほど懇意だったことが想定できます。この時、大伴家持は四十歳です。一方三形王は初叙位が四年後ですから、初叙位の年齢も三形王が若いと考えられますので、二人の年齢差は七歳あるいは十歳違っていたかもしれません。

そうだとすれば、二人は倭歌を通した仲だったのでしょうか。

船親王あるいは池田親王の子と言えども、三形王は大伴家持を招いて歌宴を楽しむ仲だったのです。

問題はこの時期です。天平勝宝九歳は天平宝字元年に改元されましたが、それは「橘奈良麻呂の変」が起ったからです。続日本紀によれば七月に事件が明らかになっていますが、この宴は六月末になっていますから、事件発覚の一月前です。一人にとってこの事件は予想されていたという程度の問題意識ではなく、不可避との確信が二人にはあつたはずで、大伴家持は兵部大輔ですからなおさらです。この時の宴では大伴家持の歌しか収録されていませんが、そのことが事件のひつ迫性を物語っています。

大伴家持は「昔の人」を偲んでいます。聖武天皇、橘諸兄左大臣が生きておられたら、こんなことにはならないと詠んでいます。

そして予想したように「橘奈良麻呂の変」が起るのです。多くの犠牲者ができました。ところが万葉集では「変」が鎮圧された時期の天平宝字元年(七五七)十二月に開かれた宴で詠まれた歌で、「十二月十八日に、大監物三形王の宅にして宴せる歌三首」(巻二十・四四八八から四四九〇)という題詞の歌、三首が万葉集に収録されています。

この時は、主人の大監物・三形王、客の大蔵大輔・甘南備伊香真人と大伴家持がそれぞれ一首ずつ詠んでいます。

まず大蔵大輔の**甘南備伊香真人**を紹介します。

甘南備伊香は以前に伊香王と呼ばれた皇族の一人でした。天平十八年(七四六)四月に無位から従五位下に叙せられています。初叙位が従五位下ですから四世王(天皇を一世として)以降の皇孫です。どの皇族の王かはつきりしません。その年の八月に雅楽頭に任じられています。天平十七年に大伴家持が従五位下に叙せられていますのでほぼ同じ年齢と考えてよいでしょう。主人の三形王はその三年後に従五位下に叙せられていますので三形王が一番若いと考えられますが、この三人の年齢に大差はなかったでしょう。同じ年配で、歌を通した仲なのでしようか。気楽に話し合える関係であったことがうかがえます。甘南備伊香は、その自作歌、四首が万葉集に収録され、万葉歌人と称されうる人物です。

この宴で詠まれた三首の歌の調子は似通っています。題詞の示すように、「橘奈良麻呂の変」が一段落して、新年と共に、世情も一新されるように、希望をつないだ歌になっています。

伊香王は従五位下叙位から三年後の天平勝宝元年(七四九)七月に従五位上に叙せられます。早い昇進といえます。それから二年後に伊香王と二人の息子は甘南備真人の氏姓を賜ります。甘南備伊香真人はこの宴の日から五年後に従五位上で備前守に任ぜられます。大伴家持が因幡守を終えて帰京した時期です。

それから、「藤原仲麻呂の謀反」(天平宝字八年七月)後に神護景雲二年(七六

八) 六月に越中守に任じられ、宝龜三年と八年の一月にそれぞれ正五位下と正五位上に叙位されます。続日本紀において、その後の消息は不明です。

この宴の時、大伴家持は兵部大輔から右中弁に任じられていました。この大伴家持の歌の左注にある右中弁は続日本紀では確認できませんが、万葉集の記事の正確さとそれに大伴家持自身のことですから右中弁だったのいうのは正しいのでしよう。兵部大輔から数ヶ月して右中弁になっていたことになりす。三人の他に、もう一人の客がいたのではないでしょう。大伴家持を右中弁大伴宿禰家持と公称名で記録した人です。この当時歌の筆記等、大伴家持を助けていたのは大原今城です。彼が同行したのでしょうか。そうであれば少なくとも表向きは歌会の宴だったことになりす。主人の三形王の官職だった大監物(だいけんもつ)は大宝律令職員令によると中務省の役人で大蔵省・内寮省の出納を監察(鍵の管理)していた役所で定員は二人です。天平宝字元年六月と同年十二月の二回、大監物・三形王宅で宴をもっています。続日本紀によるとその六月に従五位下の田口朝臣御直が大監物に任じられています。三形王が大監物というのは大監物が二人いたということでしょう。文献によると天平十九年から延暦十年までの四十五年間に続日本紀に記録された大監物は二十一名(延べ二十三名)になるといわれています。三形王のように続日本紀に記録がなくて万葉集で確認される例もあるわけですからこの数字が実態を表しているかどうか分かりませんがそれでも平均在位期間は二年です。職務上、長くなるのは好ましくないから、短期間で交代していることが想定されます。皇孫が約半数を占めているといわれます。

大伴家持が兵部大輔から右中弁の役職についていることにこだわってみす。続日本紀では確認できないことは先述しています。

右弁官は、兵部省を管轄していますから、一貫した人事だったことになりす。こういう人事が発令されたということは、大伴家持は「橘奈良麻呂の変」には係わっていないかと想定した方がよさそうです。大伴家持は左大臣・橘諸兄を尊敬し、その長子の起こした事件に無関係でいられるわけではないと思えるので、この人事は不可解です。

この事情に関しては別冊で考察しています。

一方、大伴家持と三形王らは中臣清麻呂宅をも訪ねています。

「二月に式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅にして宴せる歌十五首」と題詞にあるように大勢で出かけています。

題詞の「二月」は天平宝字二年二月のことで、「橘奈良麻呂の変」は表立っては鎮まっていたのでしよう。

中臣清麻呂は後に右大臣(正二位)に昇進しますが、この時の「式部大輔ですが、続日本紀では確認できません。

この、三形王は一首(巻二十・四五〇〇)を詠みます。主人の中臣清麻呂の徳を慕う

歌です。この時に訪問者たちは、中臣清麻呂の人徳を慕って集まったのでしよう。何か願い事でもあつたのかもしれないませんが、それは想像しにくいのですが、一年後に大伴家持は万葉集の歌の収集を終えるのですから、万葉集の完成をどうしたらよいか相談にきたのではないかと想定しています。この時三形王の官職は治部大輔でした。「変」後に叙せられた官職ですが、続日本紀では確認できません。

この宴は大原今城が企画したようですが、大原今城の官職は治部少輔ですから、三形王の直属の部下だったことが分かります。

大原今城は大伴家持の万葉集編纂を最後まで助けていますから、大伴家持がどれほど信頼していたかは明らかです。「変」で亡くなった大伴池主の代わりを務めていたのです。大原今城のこの時の官職は続日本紀で確認できます。

氷上川継の一味として日向介として流罪になった三形王は、この万葉集の三形王と同一人物と想定できるので、大伴家持とは深い交流があつたことが分かります。

再び、続日本紀に戻ります。奇妙なことに宝龜三年(七七二)一月に三方王と宗形王が共に無位から従五位下に叙位されます。

そして宝龜五年(七七四)一月に弓削女王が無位から従五位下に譲位されています。この、三方王と弓削女王とは先述した三方王と弓削女王とどんな関係があるのでしようか。

ところが、先述したように、二人は船親王あるいは池田親王の息子、娘であることから思いつきました。「藤原仲麻呂の謀反」で、船親王と池田親王は王に格下げされ、それぞれ隱岐国と土佐国に流罪になっていたので、三方王と弓削女王も共に流罪になつていたと考えたのです。

光仁天皇が即位されて、「橘奈良麻呂の変」、「藤原仲麻呂の変」、それに道鏡に関連して罪を負った人たちがすべて許すとの勅がでたのは宝龜元年(七七〇)十一月でした。この勅によつて、三方王、弓削女王、それに宗形王は許されて叙位されたのです。それでも復位するのではなく、無位から始まつたのです。三方王と弓削女王がいつ、結婚したかそれは不明ですが、夫婦だつたの、行動を共にしていたのです。

そして氷上川継事件の直前では三方王は従四位下、弓削女王は正五位上に昇進していました。父たちと配流される前にやつと戻つたということですが、配流期間が約六年、それから約十二年間の務めの結果です。それが「氷上川継事件」で再び、日向国に配流されたのです。

氷上川継と三方王とを繋いだのは、父が配流になり、二人とも配流の浮き身を味わつたということでしょうか。

その二 大伴家持

左大弁(従三位、兼春宮大夫)だった大伴家持も、官職を剥奪され、京外に追放されるという刑罰を受けました。

役職上、罪状を問われているとは思えません。左大弁には治安を担当する部場を管轄していないからです。

氷上川継は事件の約一月前に因幡守に叙任されました。二十二年前と言え、大伴家持も因幡守だったことから、親密さを深め、氷上川継の考え方に共鳴するようなことがあったのかもしれない。心情的関与です。

氷上川継の一味として日向国に配流になる三方王は先述したように大伴家持とは親密な関係があります。氷上川継と大伴家持を繋ぐ糸があるとすればそれは万葉集を通した「三形王」であることは明確です。

しかし、大伴家持の場合には事件から約四ヶ月後の同年五月に参議・春宮大夫(従三位)に復します。

刑罰が軽かったと思えるのは、桓武天皇の大伴家持への信頼が強かったからと、関与が認められなかったからと想定しています。

それでも一ヶ月後の同年六月には陸奥按察使・鎮守將軍の兼任の人事が発令され、桓武天皇との関係が気まぐらくなつていきます。

この人事は大伴駿河麻呂と同じ官職だったことから、武門の大伴家の果たすべき役職であり、兼任ですから、この人事はこの時点では特別な意味は持っていなかったと考えます。

それは翌年の延暦二年(七八三)七月に中納言に叙せられたことから推定可能です。しかし、この時期から七十数年続いた平城京から長岡京遷都が具体化し始めたのです。

長岡京遷都は桓武天皇が主導され、藤原種継が中心になって促進しようとした事業でした。

聖武天皇の難波京建設、恭仁京遷都、更に紫香樂京建設を経験した大伴家持が、長岡京遷都に批判的だったと想定するのは可能です。

氷上川継も、父の塩焼王が紫香樂京への遷都に対して聖武天皇に意見を言ったために伊豆国に配流されたといえ、結果的には正しかったと確信を深めていたのでしょう。

紫香樂京遷都は盧舎那仏造立による国家安泰を願われる聖武天皇の強い決心の表れですが、結果的には財政難に直面しても、平城京に戻って大仏が造立されたのです。塩焼王の指摘は現場の立場からは正しかったのです。

大伴家持と氷上川継は新都建設にまつわる問題意識を共有していたことは、想定できます。一人とも新都建設に批判的だったのかも知れません。その点では左大臣・藤原魚名も……。同じ藤原家といっても、長岡宮遷都を推進した藤原種継は藤原宇合の孫ですが、魚名の父は藤原房前です。藤原分家の間で、対抗意識があったのです。

長岡京はわずか十年しか続きませんでした。そして桓武天皇は平安京に遷都され、千年の都の基礎を築かれたのですが、少なくとも長岡宮遷都は中途半端な結果になりました。

長岡京遷都問題は大伴家持の立場を不安定にしました。その経緯を続日本紀によって考察してみます。

延暦二年（七八三）五月に勅によって、山背国乙訓郡長岡村の地を視察するために使いが派遣され、翌月に造長岡宮使が任命されます。従って、長岡京建設が本格化したのは延暦二年五月からです。

構想は数年前から上がっていましたが、大伴家持はその考え方に反対していたはずで

ところが、この時の三ヶ月前の同年二月に大伴家持は持節征討將軍に任じられていたのです。

長岡京造営に反対されないうちに、大伴家持は陸奥国に遠ざけられたのです。

それから同年十一月に桓武天皇は長岡宮に移られます。皇后、皇太后も移られ、長岡宮遷都が宣言されたのです。その後も工事は続行されていますので、未完成のまま遷都されたことが想定されます。

それから一年と九カ月後の延暦四年（七八五）八月二十八日に、大伴家持は中納言・従三位・春宮大夫・兼陸奥按察使・鎮守將軍で亡くなりました。行年（享年）は六十八歳でした。

ところが、亡くなって一カ月後に長岡京の建設現場で、中納言の造長岡宮長官の藤原種継が暗殺されるという事件が起こります。

大伴家の身内の関与が判明し、事件の関係者は勿論、すでに亡くなっていた大伴家持は除名処分、その子の永主は配流の処罰を受けます。大伴家持は大往生したわけではありませんでした。もし、このまま、つまり大伴家持に恩赦がなかったら、今の万葉集はどんな風に語り続けられることになったでしょうか。

幸いなことに二十一年に及ぶ永い汚名期間の後、桓武天皇の恩赦によって大伴家持たちは赦免されるのです。

さらに余談になりますが、大伴家持と「藤原種継暗殺事件」に関与したとして配流されていた人たちの赦免を告げられるとすぐに、桓武天皇は息を引きとられたことが、続日本紀に生々しく記述されています。

桓武天皇は万葉集の歌人であり、万葉集を編纂完成させた大伴家持の名誉を死の間際に回復されたのです。

桓武天皇と大伴家持の関係は、深いところで、密接につながっていたのです。

その三 五百枝王

まず、五百枝王（いおえのおおきみ）が配流の地で拘束を受けていたという考え方を裏付ける記事があります。

「事件」から十七年後に、配流の地で「伊予国の国府周辺に住むことを赦す」との勅があったことが記されています。

断罪された人たちを赦せるのは天皇のみです。五百枝王は配流の地で少し自由を得たのです。

延暦二十四年後に改元された大同元年三月十七日に崩御されるのですが、同月に重態とられた桓武天皇は五百枝王を宮中に召され、本来の位階の従四位上に戻されました。五百枝王は延暦三年（七八四）十一月に従四位上を叙位されていたので、五百枝王は「氷上川継の変」に関与していたのではなく、「藤原種継暗殺事件」に連座したことは明らかです。

五百枝王がどんな人物かは、能登内親王が亡くなった時の薨伝（天応元年二月薨）で明らかにされています。

五百枝王の母は能登内親王で、父は市原王です。母は光仁天皇の娘で、桓武天皇とは兄妹の関係です。従って五百枝王は桓武天皇にとって甥になります。

一方、父の市原王は、志貴皇子のひ孫になります。万葉集に八首の歌が収録されている市原王と同一王と考えられます。

桓武天皇は同じ志貴皇子の孫ですから、市原王と能登内親王とは世代が異なりますが、万葉集歌によれば、市原王は一人子（巻六・一〇〇七）ということか想定されるので、年齢的には結婚するのに二人は似つかわしいことになります。五百枝女王と五百枝王とが生まれたと記しています。

ところが、奇妙なことに、二人は光仁太上天皇が崩御された天応元年（七八一）八月に同時に従四位下に叙位されます。三世王（天皇を二世として）の証です。だからこそ、桓武天皇は重態にも関わらず、五百枝王を宮中に召されたのでしよう。納得がいきます。

五百枝王と大伴家持たちの関係を論ずるとすれば、父の市原王と大伴家持の関係にあります。

市原王は万葉集歌を辿っていくと、志貴皇子、春日王、安貴王と市原王と続き、志貴皇子のひ孫になります。

志貴皇子は六首、春日王は一首、安貴王は四首、市原王は八首の歌が万葉集に収録されています。巻八・一五九四番の歌の左注には、皇后宮の維摩講で、琴を弾いて歌を誘導している市原王のことを記しています。大伴家と交流があり、大伴家持と親しかったことが分かります。

市原王は天平十五年（七四三）一月に従五位下を初叙位されています。五世王（天皇を一世として）ですから、特別な利点はなかったと想定すれば、その三年後に大伴家持も従五位下に叙位されるので、ほぼ同年齢ということになります。

市原王は東大寺の建立にたずさわっていたようです。

天平宝字七年（七六三）一月に正五位下で摂津大夫に任じられます。大伴家持と盟友四人組の一人で、市原王の上司だった佐伯今毛人（従四位下）の造東大

寺長官を引き継ぎます（天平宝字七年四月）。この翌年に「藤原仲麻呂の変」が発生するのですが、その年の一月に吉備真備（正四位下）が造東大寺長官に任じられ、その後の市原王の消息は途絶えます。卒伝もありません。

「藤原仲麻呂の変」に巻き込まれたのでしょうか。それでも先述したように、宝龜元年十一月には勅によって許されているのですから、復位の可能性もあつたはずです。

多分病死だったのでしよう。こうして考えてみると、氷上川継事件の一味と考えられた人たちは、大伴家持を中心にした倭歌（万葉集歌）を通じた若者たちの交流があつたと考えることができます。

五百枝王は父のことはよく理解していたでしょうが、祖父の安貴王、曾祖父の春日王、それに天智天皇の皇子志貴親王のことは勿論、その妃の多紀皇女（春日王の実母、一首）のことを良く知っていた大伴家持から、自分の先祖の話を聞くことがいかに楽しかつたかは想像できます。

五百枝王は大伴家持歌壇（？）に入り浸りになっていたとしても、おかしくはありません。長岡宮遷都には批判的だった大伴家持を中心にした交流に集まる若者たちが、師の気持ちに共感するのは自然の成り行きです。

従つて推定になるのですが、大伴家持たちの歌壇では長岡宮遷都に反対という雰囲気が強かつたと思えます。

ただ五百枝王は、彼の母の兄が桓武天皇なのですから、天皇が推進を認められた遷都に異論を挟む余地は全くありません。

しかも、生前の大伴家持は決して暴挙を実行することを決して許さなかつたはずです。大伴家にとつて天皇は絶対だったからです。

その証拠として、藤原種継が暗殺されたのは、大伴家持の死後だったからです。実質的遷都推進者の藤原種継への反感から、一部の若者の暴挙によって暗殺に走つたと想定されます。

それから約二十一年後に桓武天皇が瀕死の病床につかされると、皇太子の時代から倭歌を習い（桓武天皇は曲宴を頻繁に開いて、倭歌を楽しませている）、信頼していた大伴家持、それに可愛い甥の五百枝王をも断罪したままにしておくことができなかったのです。

桓武天皇は瀕死の状態で、五百枝王と大伴家持たちを赦されたからです。

五百枝王は桓武天皇の葬儀に加わりませす。葬儀が済んで、二世王の皇族として復位するのですが、桓武天皇に感謝をしつつ、自分がこれから皇族に留まることはできないとして、春原朝臣姓をもらつて臣籍降下しました。

平城天皇の弘仁六年（八一五）一月に春原五百枝として、従三位で、右兵監督・兼下野守に任じられています。

そして天長五年（八二八）に正三位を叙位されています。大赦から約二十二年も生き続けています。しかしそれ以降の消息は不明です。薨伝はありませんでした。

五百枝王には、姉あるいは妹の五百井女王（いおいのひめきみ）がいます。光仁太上天皇が崩御された年の天応元年（七八一）の二月に母の能登内親王が亡くなりますが、その年の八月に、二人は同時に従四位下に叙位されます。

この初叙位から、二人は双子ではないかと想定したくなるのですが、いずれにしても数歳しか年齢差はない同母兄妹（あるいは姉弟）です。

五百井女王は、五百枝王の配流中に正四位下（延暦十五年七月）に叙位されますので、責任を取らされた形跡はありません。延暦十九年（八〇〇）一月に五百井女王の別荘に桓武天皇が行幸されていますが、五百井女王としては隠居していたのかもしれない。

五百枝王の最後の叙任記録から約三年後の弘仁八年（八一七）十月十日に、尚侍・従二位で亡くなっています。皇后、妃、夫人意外では女性としては最高位階で亡くなったこととなります。従二位というのは男性であれば左大臣に相当する位階です。二人の同母兄妹（あるいは姉弟）は、一時的に不幸な時期があつたにせよ、桓武天皇に感謝しつつ亡くなったと想定しています。

その四 左大臣・藤原魚名

ところが、意外な重要人物の関与が明るみになりました。

左大臣・正二位・兼大宰帥の藤原魚名です。

藤原家でも大伴家との関係が良好だった藤原房前の五男です。

左大臣を解任され、魚名の息子の鷹取（正四位下）は石見介に、藤原末茂（従五位下）は土佐介に左遷されます。

魚名は大宰府への途中病気になる、大宰府に赴任することなく、延暦二年七月二十五日に大宰帥・正二位で亡くなりますが、祖父（不比等）、父（房前）の功績を考慮して、死後に左大臣を追贈（復位の意）されました。息子たちもほぼ同時に復位します。

こうして考えると、「氷上川継の変」には、大きな背景があるようですが、あくまで、長岡宮遷都問題がキツカケになったと想定しています。

大伴家持は左大弁・兼春宮太夫であり、藤原魚名は左大臣です。政治の中枢にいる人物です。

二人が氷上川継と酒の席で、長岡京遷都が話題になり、遷都の問題に心情的に氷上川継の考え方に同調したのでしょうか。それを氷上川継は誤解したというのが真相のようには思えません。

その五 藤原浜成

先述していますが、氷上川継の妻は、大伴家持の義母の大伴坂上郎女を愛した藤原麻呂の子の浜成の娘、藤原法壹(ほういち)です。

藤原浜成は延暦九年(七九〇)二月十八日に大宰員外帥・従三位で亡くなっています。享年六十七歳ですから、大伴家持が六歳年長ということになりますが、同世代ですし、大伴坂上郎女を介して親交もあつたはずです。当然、その氷上川継の妻のこともよく知っていたでしょう。大伴家持が氷上川継と親しかったというのは推定できます。

法壹の父、藤原浜成は天応元年(七八一)四月に大宰帥(従三位)に任じられました。が、二月もすると大宰員外帥に降格になりました。理由は不明ですが、薨伝によれば政績不信と記録されています。そして大宰員外帥のたま、以前任じられていた参議のまま、侍従を務めていたようです。その浜成も氷上川継一味とされ、侍従・参議を解任され、大宰員外帥だけに降格されました。そして約八年後に亡くなりました。

「氷上川継の謀反」は、一見、氷上川継一人が仕組んだ小さな謀反のように思っていますが、関係者を調べてみると、多くの人が関係していたことが分かります。そして多くの人たちが連座の罪を問われました。

配流後の氷上川継の残された生涯

三嶋に配流になっていた川継が、配流先でどんな生活を送っていたかわかりませんが、その地で彼は生き続けていたのです。

桓武天皇も年を重ねられるにつれて、これまでに自分が裁いた人たちへの恩赦の思いが募っていきます。

早良親王(桓武天皇の弟君で、皇太子であった早良親王を、廃して自分の子を皇太子にしたこと)に対しては早良親王を崇道天皇として遇されたり、井上内親王・也戸王(皇太子であった也戸王に代わって自分が皇太子になった)に対して陵墓を整備したり、氷上川継それに藤原種継暗殺事件で除名処分を受けていた大伴家持とこの事件の関係者はすべて恩赦されました。

氷上川継に限って話を続けます。

延暦十六年(七九七)十二月に流人・氷上川継の課役が免除されました(約六十歳)。

延暦二十三年(八〇四)十二月に恩赦が発せられ(約六十七歳)、事件関係者の入京が許されています。

赦免され、従五位下に復位した氷上川継の、大同元年の年齢は、従五位下初叙位の年齢を約四十二歳と仮想すれば、推定年齢は六十九歳になっていました。

その後の氷上川継の記録がわずかながら日本後紀に残されています。

平城天皇即位後の大同四年(八〇九)二月(約七十二歳)に典薬頭に任じられ、その三年後の弘仁三年(八一二)三月には伊豆守に任じられています(約七十五歳)。

伊豆国は、父も自分も配流になった地です。どんな気持ちで赴任したのでしょか。位階は従五位下のままでしたから、新田部親王の孫でありながら、氷上川継も不遇な人生を歩んだことになりました。

伊豆守に任じられた時はすでに推定年齢は約七十五歳でしたから、不遇の思いで生涯を終えたことになりました。

伊豆守以後は職を辞したでしょう。卒伝はありませんので亡くなった時のことはわかりません。

配流の罪人として拘束の身で、伊豆国に約二十三年間、生き続けました。

自分の終の棲家とまで考えていたでしょうが、病死でなければ、伊豆国に留まることは考えなかったでしょう。想像したいのは母の不破内親王が亡くなった淡路国の土地を訪ね、そこを安住の地にしたのではないかと想定しています。

その他の恩赦を受けた人たち

延暦二十四年（八〇五）三月に入京を許された人たちは、吉備泉、五百枝王、藤原浄岡、藤原雄依、それに山上船主でした。

順追って、どの事件に関与したのか等を説明します。

まず**吉備泉**です

吉備泉は右大臣だった吉備真備の子ですが、「氷上川継の謀反」および「藤原種継の暗殺事件」とは全く関係がありません。卒伝によれば、延暦の初めに、従四位下でありながら、伊予守に任じられます。そして卒伝にあるように吉備泉の度量が狭く、短気で反抗的な性格から部下に訴えられ、詔使が派遣されることになり、その結果、佐渡権守に任じられます。明らかに左遷ですが、後に父の誕生地、吉備国に塾居の身になっていたことになりました。

恩赦で入京し、正四位下に復位し、弘仁四年（〇）一月に、正四位上に昇進します。それ以降、吉備泉は役職に就くことなく、弘仁五年（八一四）閏七月八日に、散位・正四位上で亡くなります。享年七十二歳でした。

右大臣で亡くなった吉備真備の子ですが、五十一歳の時に生まれたことになりません。親子と確定できる年齢差です。

次は先述しましたが、**山上船主**です。

山上船主は神護景雲元年（七六七）八月に正六位上から、従五位下に叙せられました。続日本紀に初めて登場します。

陰陽寮允を務めていました。同二年（七六八）六月に「朝臣」の姓を賜っています。同三年八月に陰陽助（筑後国の掾を兼務）に任じられています。

陰陽寮に長く勤めていたようです。

宝龜七年（七七六）一月に従五位上に昇給し、同年三月に陰陽頭・兼天文博士を任じられました。そして宝龜十年（七七九）三月には甲斐守を兼任すること

になりました。そして正五位下まで昇進していました。

それから三年弱後に「氷上川継の変」に加担し、隠岐に配流になりました。

それから約二十四年後に大赦を受けて、入京をゆるされています。

その後の消息は不明です。

ただ、年齢を大胆に推定すれば、従五位下の初叙位の年（神護景雲元年（七六七）を約二十歳とすれば、大赦によって入京が赦されたのは、それから約三十八年後ですから七十歳に近い年齢だったこととなります。官職につくことは難しいでしょうが、陰陽師として生涯を終えられたでしょう。

山上憶良との関係は不明ですが、同門であることは想定可能でしょう。

ただ、先の初叙位の年齢を約三十歳とすれば、山上憶良が亡くなった天平五年（七三三）から五年後に生まれたことになり、明らかに山上憶良の子ではなく、孫の世代になりますが、山上憶良の子で、続日本紀に登場する人物がいないので、これ以上の推定はできません。

次は藤原家出身の二人です。

入京を赦された人の中に、藤原家出身の人物が二人いました。どんな人物だったのか調査してみました。まず藤原雄依です。

雄依は左大臣・藤原永手の次男です。「藤原種継の暗殺事件」に関与したとして遠流に処せられました。

先述しましたが、左大臣・藤原魚名の先代の左大臣が雄依

の父の永手です。二人の左大臣は藤原房前の子たちです。二人の左大臣とその息子たちが関与していることから、長岡宮遷都に係わる藤原宇合家と藤原房前家の覇権争いが底流にあったと考えざるをえません。

雄依は神護景雲元年（七六七）一月に正六位上から従五位下に叙位されます。

そして、同三年（七六九）二月に称徳天皇が左大臣・藤原永手邸に行幸され、永手に従一位、長男の家依に正五位下、それに雄依に従五位上（それぞれ一階級昇進）を叙位されました。雄依の前途は洋々たるものでした。雄依は着実に、昇進していきました。この昇進を藤原種継の昇進と比較すると、これまで明らかでなかったことが分かってきました。

種継は雄依よりも二か月早い、天平神護二年（七七六）十一月に従六位上から従五位下に叙位されています。

三か月の差ですから、ほとんど同期と考えてよいでしょう。しかし、雄依の父が左大臣ということもあり、位階は二階級も上で、昇進が推移していきました。ところが、雄依の父の左大臣・永手が亡くなり（宝龜二年（七七二）一月）、種継の兄の良継が内臣（光仁天皇、宝龜二年（七七二）三月）となり、形勢が逆転していきます。

そして桓武天皇が即位されて、長岡宮遷都が本格化すると、その形勢は全く逆

転するのです。

種継は延暦二年（七八三）四月に従三位に、同三年十二月には正三位に叙位されました。

一方、雄依の兄の家依は延暦四年六月に参議・兵部卿・従三位・侍従・兼下総守で亡くなりますが、その兄よりも高位階に昇進していましたし、雄依は、その年の八月に正四位下に叙せられたばかりでした。完全に三階級も逆転し、その差は決定的になっていました。

まさしく藤原種継は長岡宮遷都を主導される桓武天皇に取り入ったということでしょう。「氷上川継の謀反」と「藤原種継の暗殺事件」の底流には「長岡宮遷都」が共通の問題だったのです。

続日本紀によると、藤原種継が暗殺されたのは延暦四年（七八五）九月でした。一月前に大伴家持は亡くなっていました。

斬首者もでるほどの断罪が下されたのですが、すでに亡くなっていた大伴家持も除名処分、息子の永主は配流になり、雄依もまた遠流の断罪を受けます。

しかし、雄依の名は大赦の時に初めて明らかになりました。そして復位するのですが、延暦四年五月に叙位された従四位上であり、その年の八月に叙位された正四位下ではありませんでした。暗殺の一か月前の八月の叙位は公認されなかったこととなります。

大赦後の藤原雄依の消息は日本後紀から消えます。

従五位下の時の年齢を二十歳代半ばとすれば、大赦はそれから三十九年後ですから復位した時の雄依の年齢は六十歳半ばだったこととなります。左大臣・永手の息子として、この年齢で復職することはなかったでしょう。卒伝はありません。

藤原浄岡は、「氷上川継の事件」の約二か月前の天応元年（七八一）年十一月に正六位上から従五位下に叙位されました。貴族として国史に記録される位階に達したのです。この時の浄岡の年齢は、藤原家出身ですから、原則的には二十歳代半ばであったことが推定されます。この時、氷上川継は先述の想定からすれば、四十歳代になっていましたから、氷上川継との特別な関係を想定すべきです。ただ、浄岡が従五位下を叙位された時に、大伴家持も従三位に叙位されたのですが、この時は、光仁天皇が歌と宴を楽しまれた特別な時だったということです。浄岡は大伴家持とこの宴を企画したと考えることは可能です。

想像を膨らませれば、浄岡は大伴家持の部下だった可能性もあります。ただ、「氷上川継の変」では、浄岡は遠流になり、大伴家持の直接的関与は認められていませんので、浄岡と氷上川継の直接的関係を考えざるを得ませんが、その背景は不明です。

ただ、強いて挙げれば、長岡宮遷都を主導した藤原種継が、藤原宇合の子であ

り、先述した左大臣の魚名と、「藤原種継の殺人事件」で遠流になった藤原雄依が藤原房前の子であり、藤原家の間の覇権争いであったと考えれば、納得は行きます。そうすれば、浄岡は藤原房前家の出身であり、ひよつとすると雄依の子の可能性も出てきます。

この若き浄岡は将来性が期待されたのに、「氷上川継謀反」に連座して、二十三年間の配流生活を送ることになったのです。

桓武天皇が瀕死の病床で、浄岡は氷上川継と共に許され従五位下に復位しました。

それから、平城天皇が即位された大同三年（八〇八）七月に典薬頭に任じられます。そして翌年の大同四年（八〇九）二月に、氷上川継が典薬頭に任じられました。二人の関係は、配流という負い目を負っています。同時に藤原清岳が従五位下で筑後守に任じられています。位階からしてこの人物は浄岡でしょう。浄岡は、典薬頭を氷上川継に譲って筑後守に転出したのです。

浄岡はまだ若いはずですが（四十歳代後半と推定）、これ以降の消息は、日本後紀から消えます。

先述しましたが、氷上川継もまた、それから三年後の弘仁三年（八一二）三月に、父の配流先だった伊豆国の伊豆守に任じられ、その後の消息は日本後紀から消えます。

藤原浄岡は、若い時に氷上川継と出会い、筆舌に尽くせない不幸な生涯を送ったこととなります。